

利用実験レポート⑥

デジハブを通じて「東京」を読む



吉見 俊哉

東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授

プロフィールはp.2を参照

デジハブ利用実験の概要

今回の利用実験では、デジハブ収蔵の広告資料が都市イメージの分析や学習にどう利用できるかについて2つの授業で試行した。実験を実施した授業は、東京大学の学部前期課程の80～90人規模の科目と、大学院修士課程で主に留学生が参加する20～25人規模の科目である。両者は幾つかの意味で対照的だった。まず、前者は学部1～2年生対象なので非常に若い学生たちが参加者であるのに対し、後者はそれよりも5歳くらい平均年齢が高い。また、前者は100人に近い学生が集まったので、その数の処理が大きな課題となった。他方、後者は留学生が受講者の大半で、授業も英語で行った。したがって、後者では日本についての予備知識を前提にできないことが別の課題として存在した。

授業ではまず、講師の吉見が数年前に制作したMOOC「Visualizing Postwar Tokyo」をベースに戦後東京の歩みについて概説的授業を進めた。その上で、授業参加者を

4～5人程度から成る班に分け、各班がデジハブの資料を使用しながら戦後東京のイメージの変遷を記号論的、社会学的、歴史的に解説する授業を構成する実験に移った。前半の講師による解説授業では、①東京タワーと戦後東京、②皇太子成婚と戦後東京、③銀座と戦後東京、④東京オリンピックと戦後東京、⑤新宿と戦後東京などのテーマを取り上げ、デジハブ収蔵の資料も含め、戦後東京に関するドキュメンタリー映像や広告を多用した。

他方、後半の学生自身が各班に分かれて自らデジハブを利用して授業を構成していくのがこの実験の最もスリリングな部分であった。前半の授業を通じ、学生たちには「東京」のイメージを分析することが、社会学的、文化史的、都市論的にどのような意味を持つのかについて説明しており、そのような認識を基礎に、広告の中で東京がどう描かれ、そこから東京の過去と未来、異なるメディアにおける表象がどのように比較可能か、その比較からどのような都市の断面が見えてくるのかについて検討してもらった。特に、それぞれの作業班には、①同一のテーマの異なる時代での比較、

東京の中の異なる地域間の比較、異なる世代、ジェンダーなどの比較の視点を重視すること、②イメージの作り手と受け手の文脈的な関係を考えることなど、幾つかの点への留意を促した。

大人数の学部前期課程の授業での利用実験

約80～90人が参加した学部前期課程の授業では、参加学生は以下の17のテーマ群に分かれた。①「東京の過去」、②「東京の未来」、③「東京オリンピック」、④「東京タワー」、⑤「東京駅(丸の内を含む)」、⑥「銀座」、⑦「新宿」、⑧「原宿」、⑨「東京の下町」、⑩「東京の郊外」、⑪「東京の湾岸」、⑫「東京の家族」、⑬「電話と東京」、⑭「鉄道と東京」、⑮「東京の道路」、⑯「東京の公園」、⑰「大阪万博」の17班である。参加者数が多かったため、これらの班分け自体が骨の折れる作業であったが、まず、学生たちとの対話から17のテーマを設定し、各学生の参加希望を集め、時には第2希望にまわってもらい班の人数が多くなりすぎないようにした。

班分け後は、会場を視聴覚教室に移し、デジハブの利用方法についてのガイダンスや守るべき義務等についての説明をした後、各班に1本ずつUSBメモリーを渡した。このUSBメモリーには、デジハブからダウンロードした「東京」に関連する広告資料が集められており、各班の学生たちはこのUSBメモリーの資料を利用してそれぞれテーマ別の検討を行い、授業終了時ごとにUSBメモリーを回収するという手続きをとった。本来ならば、学生たちがそれぞれの班で直接、デジハブにアクセスして作業をすることができれば、授業の効率や可能性はもっと広がったであろうが、現行の法制下では困難な面があるため、今回はこのような回りくどい方法を採らざるをえなかった。

授業は9月に始まり、1月に終わったが、11月末から1月までの期間は、このデジハブ利用の実験に使った。各班でのグループ・ディスカッションの後、具体的な授業の組み立

てに入り、12月に、中間発表を行った。その後、年末年始を挟んで、班ごとに作業を進めてもらい、最終回には半日の時間を設定して成果の発表会を実施した。発表会にはアドミューリアム東京および吉田秀雄記念事業財団の方々にもオブザーバーとして授業を参観していただき、17チームの発表すべてをご覧いただいた。最終的に、全グループの相互投票によって、最も良い評価を得た複数のグループを選ぶこととした。

留学生中心の大学院修士課程の授業での利用実験

他方、大学院授業は、講師による数回の東京論に関する解説授業の後、約20～25人の参加者を5つの班に分けることを行った。主な参加者は日本語が必ずしもできるとは限らない外国人留学生であったため、各班に必ず1人以上、日本語ができる者が含まれるように配慮した。授業のディスカッションやプレゼンテーションはすべて英語で行ったが、デジハブ資料を理解するには日本語が不可欠となるため、そのような措置が必要であった。

こちらの授業では、大学院の授業であり人数も限られていたので、教員側からテーマを提供するのではなく、まず班ごとに、自分たちのテーマを考えてもらうようにした。その際、留学生は韓国、中国、台湾、香港、フィリピン、シンガポールなどのアジア各地域はもちろん、欧米やトルコ、オーストラリアなど世界各国から来ていたので、自国の都市と東京の比較という視点を入れてもらった。その



ポスター「おとなにしてあげる。」松屋 1988年：「銀座」がテーマの班の発表で紹介

結果、学生たちが提案してきたのは、①消費空間としての東京、②東京におけるアートと都市、③東京をめぐる都市と移動（3班）となった。最初の2つのテーマは予想できたが、「移動」というテーマに3つもの班が集中するとは予想外だった。事後的だが、留学生の間では都市を「移動」の場として捉える意識が極めて高いことが確認された。

こちらでも、作業は学部前期課程の授業と同じ方式で進めた。すなわち、各班に東京に関する広告資料をデジハブからダウンロードして集めたUSBメモリーを渡し、それらの資料とインターネット上の海外の広告資料を比較しながら議論を進め、グループ発表を組み立てた。最終回は各班からの成果発表会とし、アドミュージアム東京および吉田秀雄記念事業財団の方々にも参観していただいた。

利用実験から得られた知見と課題

2つの活用実験を通じ、デジハブの資料が都市論、メディア論、消費社会論、現代社会論などの授業の素材として十分に有益に使えることが確認された。今回の利用実験では、デジハブの広告資料を利用して「東京」のイメージの多面性やその歴史の変容を浮かび上がらせることをテーマにしたわけだが、同じような方法で、例えば「大阪」「京都」などの都市や、「日本」「アジア」「駅」「街角」「喫茶店」「田舎」などといった異なる空間や地域のイメージをテーマにすることも可能である。参加型の授業でのそうしたテーマ

を絞ったデジハブ利用を通じ、広告がいかにそれぞれの時代や社会の映し鏡であり、また同時代への創造的な介入であるかを学生たちに理解させることができる。

他方、今回の実験を通じ、課題も明らかになった。その第1は、デジハブ資料のメタデータが整備途中であることにより、利便性に限界を感じたことである。デジハブの資料が教育コンテンツとして有効になるためには、多くの広告について、それがいつ、誰によって、どのような目的や方法で制作されたものであるかについての情報が整っていることが望ましい。しかし、新しいシステムでの運用を開始し、優先順位を決めて段階的にメタデータの整備を行っている現状では、まだメタデータが十分に付されている資料は必ずしも多いとは言えず、ネット上で検索して広告資料を探すほうが、ヒットする可能性が高い場合も生じてしまう。

第2に、特にテレビCMの動画に関して、すでにかかなりの映像がYouTubeなどのサイトに上げられている、という点である。学生たちの間には、そちらのほうが慣れ親しんでいるので使いやすい、という声もあった。しかしネット上の動画投稿サイトと比べて、デジハブは印刷広告やラジオCMなどの広告メディアを網羅しており、過去の広告にさかのぼって資料を検索できるという点が強みである。だが、検索したキーワードが付与されていないとヒットしないため、まだ豊富な資料が生かされているとは言い難い。

第3に、操作性の向上が望まれることである。今回、授業



ポスター「路面電車。Scene23都電荒川線 東京旅人。」
東京都交通局協力会 2008年：「東京の下町」「鉄道と東京」がテーマの班の発表で紹介



ポスター「東京湾進化論」千葉県住宅供給公社 1986年：
「東京の湾岸」がテーマの班の発表で紹介



ポスター「地下鉄開通80周年 東京メトロ」東京地下鉄株式会社 2007年：「東京の下町」「鉄道と東京」がテーマの班の発表で紹介

テレビCM「東京タワー」
NTT関西移動通信網 1993
年：「電話と東京」「東京タ
ワー」がテーマの班の発表
で紹介



で使用するための東京関連の広告資料を抽出するために、想定以上の時間と手間を要した。今後、さまざまな専門領域でデジハブの教育活用が活発化するためには、探している特定テーマの広告資料がもっと容易に抽出できるようになると、活用範囲が広がるだろう。

このような課題を解決するためのメタデータ改善には、時間をかけて、地道に継続的に行う作業が必要であるが、将来的に教育活用の範囲を広げてゆくためには、ぜひともお願いしたいところである。

最後に、現状の法の下では、学生たちが直接、デジハブのデータベースに教室からアクセスできないことに不便を感じた。そのために授業では、事前に講師がデジハブにアクセスし、必要と思われる資料をダウンロードしてUSBメモリーにまとめるという作業をしなくてはならなかった。しかし、それでは学生たちが、ダウンロードした限られた資料以外にアクセスできないままである。今後は、それぞれの班の関心や調査作業の発展に応じ、学生が自由にデジハブの全資料にアクセスできることを期待する。

今後の方向について

利用実験を通じて、デジハブが向かうべき今後の発展の方向性について、感じたことを述べる。まず、メタデータ整備をどう進めてゆくかという課題である。ネット上にかなりの数のCM動画が出回っている今日、デジハブとこれらのネット上の動画投稿サイトの違いを明確にしていくための取り組

みが決定的に重要である。

そのためには、外部機関にデジハブを使ってもらいながら、利用者の力を借りつつメタデータ整備を進めることも考えられるが、根本的には、デジハブのメタデータ整備業務の優先度を高め、継続的に進めてゆくことが必要である。

他方、数年先までを見通すと、公衆送信権に関する知的財産権上の法規の大幅な改正はかなり高い確率で生じてくると見込まれる。それによっては、デジハブを、教育利用という目的で、離れた教育施設などへ配信できるような可能性がある。したがって、そのような法改正がなされることも想定して、今後のデジハブの利用形態のあり方をさまざまに検討してもいいのではないか。

その基となるのが、日本全国の学校、図書館、博物館・美術館に向けたデジハブ資料の配信とアドミュージアム東京の利用促進の連動、という提案である。アドミュージアム東京は、これらの公的な教育およびミュージアム施設と連携協定を結び、デジハブの教育利用の促進とアドミュージアム東京への来館者数の増加という両面で、協力体制を組むことも考えらえる。

すなわち、連携施設には教育目的でデータの配信をすると同時に、それらの学校に必ず年1回は、授業や修学旅行等でアドミュージアム東京に来館してもらい、広告全体の理解を深めてもらうようにするのである。ネット上のデジハブと汐留のアドミュージアム東京との間に還流的な仕組みを構築し、全国の小中高校に対して授業でのデジハブ資料の利用を認めつつ、学校授業の中で来館してもらえば、アドミュージアム東京の社会的価値も向上できて一石二鳥である。今回の実験プロジェクトは、そのような広範な利用が可能になったときのモデルとなるべきものであった。